

2022年度 入試結果速報

18歳人口は減少期に入っているものの、大学進学率の上昇により、大学志願者数の減少はスローペースになっている。一方で学部・学科の新増設による定員増のほか、私立大では合格者数も2019年度から増加に転じている。大学入試は競争緩和しており、既卒生は減少、現役受験生の割合が年々上昇している。

2年目を迎えた大学入学共通テストは平均点が大幅にダウンした。国公立大を中心に出願への影響が懸念されたが、入試の競争緩和が受験生の積極的な出願を後押ししており、平均点ダウンの影響は限定的だった。

今春もコロナ禍のもとでの入試となった。オンライン面接や実技動画の提出などが広がったほか、学部系統の人気にも影響がみられた。

以下、今春の共通テストの概況と3月11日時点で判明している一般選抜の志願状況をレポートする。

2022年度入試の概観

→ 大学入試の競争緩和続く

- 既卒生の減少により現役生中心の入試に
- 私立大の志願者数は増加に転じるも、合格者数増加で競争緩和

→ 共通テストの平均点大幅ダウン

- 志願動向への影響は限定的
- 国公立大では極端な安全志向は見られず、難関大で志願者増

→ 新型コロナウイルス感染症の影響

- 理系、資格系統が人気

Part 1 大学入学共通テスト概況

志願者数は前年並み、既卒生の減少続く

2022年度大学入学共通テスト（以下、共通テスト）は1月15・16日の2日間にわたり、全国677会場で実施された。

今年度の志願者数は530,367人（前年比99%）、受験者数は488,384人（同101%）となった＜図表1＞。どちらも前年並みだが、志願者の減少、受験者の増加により、受験率は92%と前年から上昇した。ただし、2020年度以前と比較すると受験率はやや低く、今年も新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）の影響があったといえるだろう。現卒別の志願者数では、現役生が前年比100%、既卒生等が同95%で、2021年度にその前年から約2割減少していた既卒生等はさらに減少した。ま

＜図表1＞センター試験・共通テスト 志願者・受験者数推移

年度	志願者数 (前年比)	受験者数 (前年比)	受験率
2013	573,344 (103%)	543,271 (103%)	95%
2014	560,672 (98%)	532,350 (98%)	95%
2015	559,132 (100%)	530,537 (100%)	95%
2016	563,768 (101%)	536,828 (101%)	95%
2017	575,967 (102%)	547,892 (102%)	95%
2018	582,671 (101%)	554,212 (101%)	95%
2019	576,830 (99%)	546,198 (99%)	95%
2020	557,699 (97%)	527,072 (96%)	95%
2021	535,245 (96%)	484,114 (92%)	90%
2022	530,367 (99%)	488,384 (101%)	92%

※大学入試センター資料より

※受験率は受験者数／志願者数

た、高等学校等の学科区分別では、普通科で減少した一方、工業科や商業科、総合学科などでは志願者が増加しており、大学志願者の裾野の広がりをうかがわせた。

なお、今年の追試験の受験許可者数は1,660人であった。新型コロナの陽性者・濃厚接触者などを含めた体調不良者のほか、トンガ海底火山の大規模噴火による津波の影響で本試験を受けられなかった受験生も対象となった。追・再試験は本試験の2週間後の1月29・30日に実施された。合わせて1,536人が受験、前身の大学入試センター試験（以下、センター試験）を通じて過去最多となった。

3科目以下受験者が増加も 長期的には私大専願者の 共通テスト離れ継続

＜図表2＞は受験科目数別の受験者数の推移である。主に国公立大志望者が受験する7科目以上、そして4－6科目の受験者数は前年並みであるが、私立大専願の志望者が中心となる3科目以下の受験者は前年比103%と増加した。受験者全体の増加分の大半は3科目以下の受験者であった。ただし一昨年の受験者数と比較すると、7科目以上で一昨年比95%、4－6科目で同93%と小幅な減少にとどまったのに対し、3科目以下では同88%と1割以上減少した。長期的視点に立てば、私立大専願者の共通テスト離れが継続しているといえる。

＜図表2＞共通テスト 受験科目数別の受験者数

受験科目数	受験者数			前年差 (22-21)	前年比 (22/21)
	20年度	21年度	22年度		
7科目以上	295,342	279,936	280,024	+88	100%
4－6科目	95,917	88,363	88,910	+547	101%
3科目以下	135,813	115,815	119,450	+3,635	103%
合計	527,072	484,114	488,384	+4,270	101%

※大学入試センター資料より

※理科の基礎を付した科目は2科目で1科目とする

※2020年度はセンター試験の数値

より思考力を問う内容 偶然の正解がしにくい解答形式に

2年目を迎えた共通テストだが、今年も授業での学習プロセスや日常生活の場面を題材にした問題が目立った。たとえば日本史Bでは「人名からみた歴史」を題材に、会話形式で古代から近代までを取り上げ、さまざまな資

料をもとに考察することが求められていた。会話文や生徒のノートの形をとった資料は他の科目でも散見され、問題文の読解にかかる時間はセンター試験時より長くなる傾向にある。

複数の資料、図などから情報を読み取って考察する力が重視されている点も昨年と同様であった。昨年に比べ図表の量が減少した科目も見られたものの、より丁寧な資料の読み取りが必要となっており、単に図表や資料を多用するのではなく、思考力を問うパーツとして資料、図表を活用していく姿勢はむしろ鮮明であったといえる。なお、数学や理科では単元をまたいだ融合問題もみられた。この傾向が今後も継続するのか注目される。このほか国語の近代以降の文章（現代文）では、今年も「実用的文章」は出題されなかった。

解答形式にも共通テスト以降、新しいパターンがみられる。理科ではセンター試験時にはなかった、数値を直接マークする設問が出題された。また、選択肢に「誤りを含むものはない」「両方とも当てはまらない」が含まれている設問、正解の数と組合せが異なる選択肢が並ぶ設問など、地歴公民、理科を中心に、より偶然の正解がしにくい解答形式がみられた。

連動型問題（解答が前問の解答と連動し正答の組合せが複数ある問題）や前の設問を誤答した場合もその誤答をもとに正しく計算されていれば正解とする救済措置のある問題は、本試験では出題されていないものの、昨年の第2日程、今年の追試験で出題された。

7科目がセンター試験時を通じ 過去最低点に

＜図表3-1＞は大学入試センターが公表した共通テストの主な科目の平均点の一覧である。前年より平均点がダウンした科目が目立つが、「数学Ⅰ・数学A」「化学」「生物」「日本史B」などがセンター試験時代を通じて過去最低点となった。なかでも注目されるのが数学の平均点ダウンである。「数学Ⅰ・数学A」では約20点、「数学Ⅱ・数学B」は約17点ダウンした。

＜図表3-2＞は河合塾が実施した自己採点集計「共通テストリサーチ」参加者の数学の得点分布である。平均点が40点近辺だったことで、今年の得点分布は「数学Ⅰ・数学A」「数学Ⅱ・数学B」とともに左の低得点側

に大きく移動した。両科目とも80点以上得点できた受験生が目に見えて減少しており、今年は理系生であっても数学で得点できなかった受験生が大勢いたことが想像

<図表3-1>共通テスト 主要科目平均点(本試験)

教科・科目名		平均点		
		21年度	22年度	前年差
英語	リーディング	58.80	61.80	+3.0
英語	リスニング	56.16	59.45	+3.3
数学	数学Ⅰ・数学A	57.68	37.96	-19.7
	数学Ⅱ・数学B	59.93	43.06	-16.9
国語		117.51	110.26	-7.3
理科①	物理基礎	37.55	30.40	-7.2
	化学基礎	24.65	27.73	+3.1
	生物基礎	29.17	23.90	-5.3
	地学基礎	33.52	35.47	+2.0
理科②	物理	62.36	60.72	-1.6
	化学	57.59	47.63	-10.0
	生物	72.64	48.81	-23.8
	地学	46.65	52.72	+6.1
地歴	世界史B	63.49	65.83	+2.3
	日本史B	64.26	52.81	-11.5
	地理B	60.06	58.99	-1.1
公民	現代社会	58.40	60.84	+2.4
	倫理	71.96	63.29	-8.7
	政治・経済	57.03	56.77	-0.3
	倫理・政治・経済	69.26	69.73	+0.5

※大学入試センター資料より
※2021年度は第1日程の平均点

できる。

大学入試センターは共通テスト問題作成方針の中で、共通テストを「高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定」する試験と定義している。今年の数学に関しては、果たして妥当であったのか疑問が残る結果であった。

このほかの科目では、「英語」「国語」の平均点の変動は小幅にとどまった。主に文系生が受験する理科①では「物理基礎」「生物基礎」で平均点がダウンした。科目選択パターンの占有率をみると、例年「化学基礎・生物基礎」が6割弱、「生物基礎・地学基礎」が3割弱、「物理基礎・化学基礎」が1割となっている。「生物基礎」は選択者が多く、多くの受験者が影響を受けた。主に理系生が受験する理科②では「生物」で前年から20点以上ダウンしたほか、多くの理系生が選択している「化学」も10点ダウンとなった。「物理」との平均点差はやや広いものの、昨年のように得点調整の対象になるほどではなかった。なお、2科目受験者の選択パターンは、「物理・化学」が75%、「化学・生物」が24%で、その他の組合せの選択者はごくわずかである。

地歴では、受験者が多い地歴B3科目のなかでは「日本史B」で11点以上ダウンし、前年より科目間の平均点差が広がった。公民では、「倫理」で平均点がダウンしたものの、他科目では大きな変動はなかった。今年は得点調整は行われなかった。

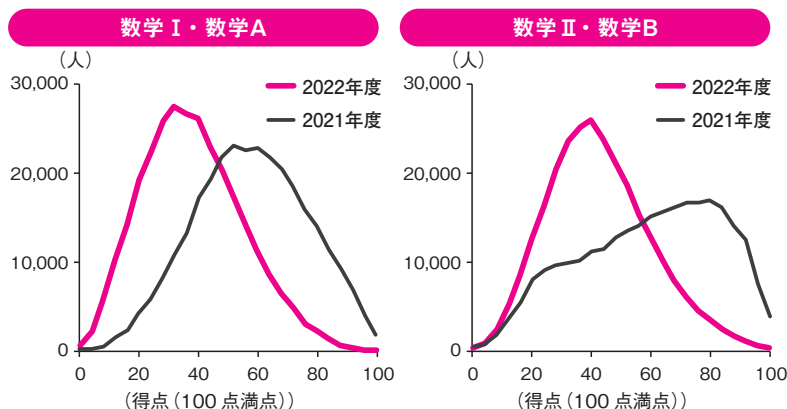
総合型平均点も過去最低

<図表4>は河合塾が推定するセンター試験・共通テストの7科目型平均点の推移である。

今年の平均点は7科目文系型(900点満点)が507点(前年差-48点)、7科目理系型(900点満点)が510点(前年差-61点)と、いずれも前年から大きくダウンした。科目別平均点でみたように「数学」「化学」の平均点ダウンにより、理系型でよりダウン幅が大きくなった。両型とも7科目型平均点の推定をはじめた2004年度以降、最低であった。

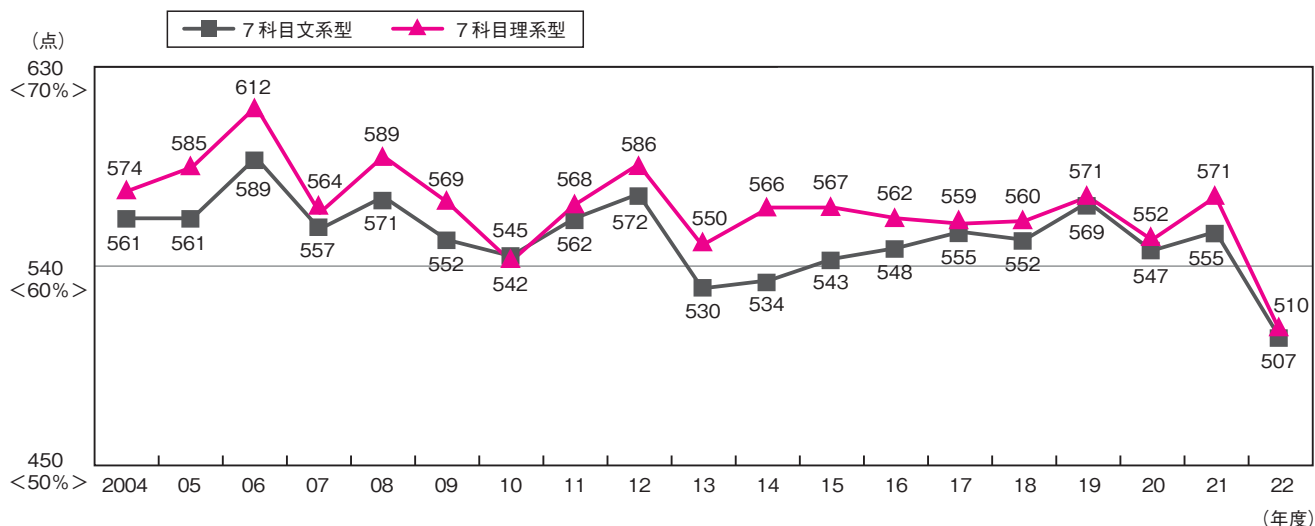
<図表5>は河合塾が実施した自己採点集計「共通テストリサーチ」参加者の

<図表3-2>共通テストリサーチ 「数学」受験者の得点分布



※河合塾実施の自己採点集計「共通テストリサーチ」参加者の得点分布

<図表4>センター試験・共通テスト 総合型平均点推移



※総合型平均点は河合塾推定

7科目文系型：英・数(2)・国・理(1)・地公(2) (900点満点)

7科目理系型：英・数(2)・国・理(2)・地公(1) (900点満点)

* 2020年度まではセンター試験の数値で、英語は筆記+リスニングの250点を200点に換算して集計

* 理科の基礎を付した科目は2科目で1科目とする

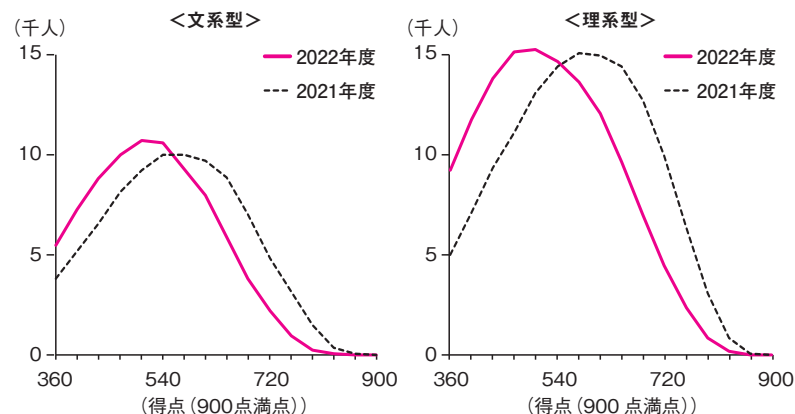
得点分布である。多くの国公立大で必要となる7科目の受験者の得点分布は、文系型、理系型ともに左側（低得点側）にシフトした。得点率8割（720点）以上の受験生は、文系型では前年比34%、理系型では同38%と、いずれも前年の半数以下となった。

3教科型のうち、主に私立文系志望者が受験する「英・国・数または地公」の3教科型では、「英語」「国語」の平均点に大きな変化はなかったことなどから、得点分布は昨今で広く重なった。一方、私立理系志望者が受験する「英・数・理」の3教科型では、得点分布は昨年より大きく左にシフトした。平均点は8%ダウンしており、数学、理科の平均点ダウンの影響が7科目型以上に色濃く出た。

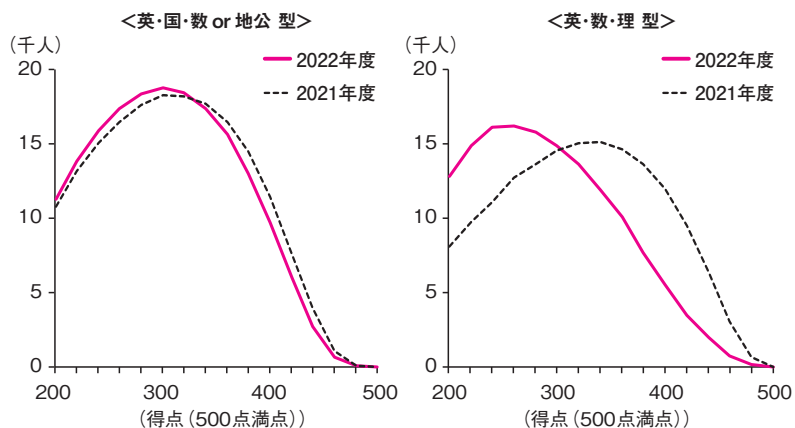
共通テストは試験時間に対する設問の情報量など、まだ試行錯誤中であるようにみえる。平均点、つまり難易度はもうしばらく安定しない科目があることが考えられる。今後の推移に注目していきたい。

<図表5>共通テストリサーチ 受験者の得点分布

7科目 受験者の得点分布



3教科 受験者の得点分布



Part2 国公立大学の志願状況

国公立大前期日程 志願者数は前年並みを維持

国公立大入試の中心となる前期日程の志願者数は234,554人（前年比100%）と前年並みを維持した＜図表6＞。国立大、公立大で分けてみると、国立大では前年を上回る志願者数となった。とくに旧帝大を中心とする国立難関10大学の志願者が約1千人増加しており、国立大全体の志願者数を押し上げた。一方、公立大は志願者前年比95%とやや高い減少率となった。

後期日程は、前年比102%と増加した。共通テストの前身であるセンター試験を例にとると、平均点が大きく下がった年には、募集人員が少なく難易度が高くなりがちな後期日程を諦める受験生が増加する傾向にあったが、今年は共通テストの平均点ダウンの状況でも積極的に出願した様子がうかがえた。近年、後期日程を廃止・縮小する動きがみられ、募集人員は減少傾向にある。今春の倍率は10.0倍へと上昇した。

公立大で実施する中期日程は、新設の大阪公立大（大阪市立大と大阪府立大が統合）で志願者が増加したほか、前橋工科大、三条市立大など今春新たに中期日程を設けた大学の影響で高い志願者増加率となった。

＜図表7＞は過去10年間の志願者数・倍率の推移をみたものである。今春は、18歳人口が前年から約2万人減少したなかでも国公立大の志願者数は前年並みとなったが、経年でみると人口減の影響は大きく、国公立大入試は緩和に向かっている。

地区別にみると、東海・北陸、中国・四国地区を除いては概ね前年並みの志願者数となった＜図表8＞。志願倍率を比

較すると首都圏が3.5倍と高いものの、他の地区では3倍を下回り地区間に大きな差はみられない。

学部系統別の志願状況 理系人気、「法」「薬」など 資格に関連深い系統で志願者増

＜図表9＞は国公立大の前期日程の志願状況を、学部系統別に集計したものである。

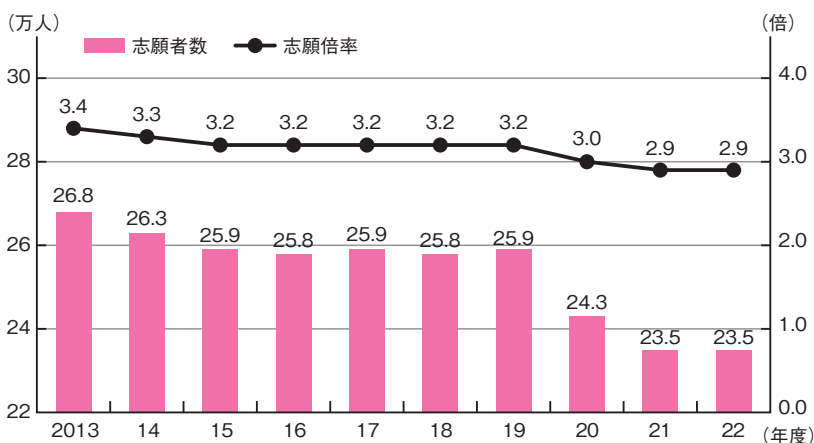
文系では「文・人文」「法・政治」学系が前年並みに留まった一方、「社会・国際」「経済・経営・商」学系の

＜図表6＞国公立大志願状況

区分	日程	志願者数					志願倍率		
		20年度	21年度	22年度	前年差 (22-21)	前年比 (22/21)	20年度	21年度	22年度
国立	前期	182,772	177,182	179,317	+2,135	101%	2.9	2.8	2.8
	後期	124,420	118,753	123,629	+4,876	104%	8.8	9.0	9.5
公立	前期	60,331	58,226	55,237	-2,989	95%	3.7	3.6	3.4
	後期	40,666	42,167	39,781	-2,386	94%	11.4	12.1	11.8
	中期	31,426	29,090	31,380	+2,290	108%	13.3	12.3	13.4
国公立計	前期	243,103	235,408	234,554	-854	100%	3.0	2.9	2.9
	後期	165,086	160,920	163,410	+2,490	102%	9.3	9.6	10.0
	中期	31,426	29,090	31,380	+2,290	108%	13.3	12.3	13.4

※河合塾調べ ※志願倍率は志願者数／募集人員
※独自日程で実施する大学は上表には含まれていない

＜図表7＞国公立大（前期日程）志願者数の推移



※河合塾調べ ※志願倍率は志願者数／募集人員

減少率がやや高くなった。

理系では、「理」「工」学系では概ね前年並み、「農」学系では志願者が大きく増加した。医療系では「薬」学系で高い増加率となったほかは、概ね前年並みの志願者

数を維持した。

以下に、主な系統について確認していく。なお、文中の志願者数・前年比はとくに記載がない場合、前期日程を表す。

文・人文学系

系統全体の志願者数は前年並みで、堅調に志願者を集めた。分野別にみると、「心理」分野で志願者が増加した一方、「外国語」分野では前年比96%と減少が目立った。大学別にみると、北海道大、神戸大などの難関大で志願者が増加した。金沢大では文系一括の志願者が前年比42%と大きく減少した。文系一括は2021年度入試より前期日程での実施となったが、初年度が他の文系学部と比べて高倍率入試だったことから警戒されたようだ。

<図表8>国公立大(前期日程)地区別志願状況

地区	志願者数			志願倍率	
	21年度	22年度	前年比	21年度	22年度
北海道	11,552	11,559	100%	2.8	2.8
東北	18,381	18,560	101%	2.8	2.8
関東・甲信越 (首都圏を除く)	22,886	22,694	99%	2.8	2.7
首都圏	46,739	47,675	102%	3.5	3.5
東海・北陸	32,339	31,453	97%	3.0	2.9
近畿	39,520	40,086	101%	2.8	2.9
中国・四国	32,515	31,366	96%	2.9	2.8
九州	31,476	31,161	99%	2.7	2.7

※河合塾調べ ※志願倍率は志願者数／募集人員

※首都圏：埼玉・千葉・東京・神奈川

<図表9>国公立大(前期日程)学部系統別志願状況

系統	志願者数					志願倍率		
	20年度	21年度	22年度	前年差 (22-21)	前年比 (22/21)	20年度	21年度	22年度
文・人文	21,946	20,560	20,473	-87	100%	3.1	2.9	2.9
社会・国際	13,031	12,867	12,261	-606	95%	3.3	3.2	3.0
法・政治	12,796	12,219	12,054	-165	99%	3.1	3.0	2.9
経済・経営・商	25,758	25,154	24,384	-770	97%	3.2	3.1	3.0
教育一教員養成課程	17,606	17,352	16,695	-657	96%	2.5	2.5	2.4
教育一総合科学課程	2,122	1,905	2,006	+101	105%	2.5	2.3	2.4
理	14,036	14,002	14,098	+96	101%	2.9	2.7	2.8
工	67,169	64,781	64,085	-696	99%	2.9	2.9	2.8
農	15,351	14,921	15,893	+972	107%	2.7	2.7	2.9
医・歯・薬・保健	34,762	35,133	35,893	+760	102%	3.3	3.3	3.3
医	14,741	14,773	15,087	+314	102%	4.1	4.1	4.2
歯	1,657	1,595	1,576	-19	99%	3.7	3.5	3.5
薬	2,620	2,851	3,120	+269	109%	3.5	3.5	3.8
看護	10,323	10,423	10,645	+222	102%	2.6	2.7	2.7
医療技術・他	5,421	5,491	5,465	-26	100%	3.0	2.9	2.9
生活科学	2,450	2,510	2,410	-100	96%	3.1	3.2	3.0
芸術・スポーツ科学	7,354	6,730	6,847	+117	102%	4.6	4.3	4.4
総合・環境・情報・人間	8,722	7,274	7,455	+181	102%	3.5	3.0	3.2
国公立 計	243,103	235,408	234,554	-854	100%	3.0	2.9	2.9

※河合塾調べ ※志願倍率は志願者数／募集人員

社会科学系(社会・国際、法・政治、経済・経営・商)

他の文系と比べ高い減少率となった「社会・国際」系では、志願倍率は3.0倍へダウンした。分野別にみると、志願者が減少した分野が目立つなか「国際関係」分野では増加した。宇都宮大(国際)、東京外国語大(国際社会、国際日本)などで志願者が増加した。東京外国語大は国際日本学部で先行実施していた英語スピーキングテストを今春より全学部に拡大し、受験料も一律値上げしたが、敬遠要因にはならなかった。

「法・政治」系では、「法」分野では志願者が増加した一方、「政治・行政」分野では大きく減少した。コロナ禍の就職を意識した動きから年間を通して人気系統だった「法」分野では、一橋大、金沢大、大阪大、九州大など全国の主要大で幅広く増加しており、高い人気を示した。

「経済・経営・商」学系では、国立大では志願者が増加した一方、公立大では前年から1割以上減少した。国立大では弘前大(人文社会科学―社会経営)、埼玉大(経済)、一橋大(商)、滋賀大(経済)など前年入試の反動で大きく増加した大学が目立った。

教育学系(教員養成課程、総合科学課程)

教員養成課程、総合科学課程を合わせた教育学系全体の志願者数は、前年比97%と減少した。教員養成課程での減少率が高いが、三重大の志願者数が前年から5百人近く減少した影響が大きく、その他の大学では志願者が増加したところもみられた。2022年度より金沢大との共同教員養成課程を新設した富山大(教育)では、募集人員62名に対し132人の志願者が集まった。同じく金沢大(人間社会―学校教育)も、前年の2倍近い187人の志願者が集まった。

自然科学系(理、工、農)

「理」学系では、「数学・数理情報」「物理」分野などで志願者が増加した。大学別にみると、東北大(理)、名古屋大(理)、大阪大(理)などの難関大で増加したほか、前年低倍率だった横浜市立大(理)、高知大(理工)などでも大きく増加した。

「工」学系では、「機械・航空」分野で志願者が大きく増加したほか、「通信・情報」「生物工・生命工」分野も前年を上回る志願者数となった。「理」「工」学系では、

横浜国立大(理工)の志願者数が前年から7割以上増加した。2021年度は新型コロナ感染拡大防止対策として2次試験を実施しなかった。志願者の大幅な減少に加え、欠員補充2次募集による合格者増により低倍率入試となった反動から志願者が集中した。

高い志願者増加率となった「農」学系では、志願倍率が「理」「工」学系よりも高い2.9倍まで上昇した。「農」学系は近年志願者が減少傾向にあったが、今春は前年入試の反動に加え、SDGs(持続可能な開発目標)への関心の高まりから志願者増加に転じたものとみる。前年低倍率だった岩手大(農)、新潟大(農)などで志願者が大きく増加した。

医療系(医・歯・薬・保健)

コロナ禍を背景に、就職を意識して難関資格に関連深い系統・分野を志望する傾向は強まり、医療系も堅調に志願者を集めた。「医」では、7年ぶりに増加に転じた前年をさらに上回る志願者数となり、志願倍率は4.2倍に上昇した。大学別にみると、第1段階選抜で共通テストの得点基準を設ける大学を避ける動きがみられた。なかでも、名古屋大では共通テストの得点基準が700点(900点満点)と高く、志願者数は半減。近隣の岐阜大では志願者が大きく増加し、受験生が流入した様子がかがえた。

「薬」では2年連続の志願者増となった。新設2年目となる和歌山県立医科大では、前年を大きく上回る志願者数となり、志願倍率は2.6倍から4.6倍へと大幅に上昇した。

学際系(総合・環境・情報・人間)

分野別にみると、「総合」分野で志願者が大きく増加、「情報」分野でも前年を上回る志願者が集まった。「総合」分野では、前年入試で低倍率だった広島大(総合科学―総合科学文科系)、徳島大(総合科学)などで志願者が大きく増加した。「情報」分野では、名古屋大(情報)、広島大(情報科学)などの難関大では敬遠された様子がみられたが、愛知県立大(情報科学)、福知山公立大(情報)、長崎県立大(情報システム)などの公立大では志願者が増加した。

<図表10> 国立難関10大学の志願状況

大学名	前期日程				後期日程			
	21年度	22年度	前年差	前年比	21年度	22年度	前年差	前年比
北海道	5,104	5,409	+305	106%	3,517	4,107	+590	117%
東北	4,499	4,392	-107	98%	1,251	1,332	+81	106%
東京	9,089	9,507	+418	105%	—	—	—	—
東京工業	3,638	3,802	+164	105%	—	—	—	—
一橋	2,564	2,588	+24	101%	1,036	1,244	+208	120%
名古屋	4,581	4,339	-242	95%	54	38	-16	70%
京都	7,045	7,210	+165	102%	379	360	-19	95%
大阪	6,991	7,501	+510	107%	—	—	—	—
神戸	6,194	6,071	-123	98%	4,042	4,052	+10	100%
九州	5,175	5,143	-32	99%	2,454	2,549	+95	104%
難関10大学計	54,880	55,962	+1,082	102%	12,733	13,682	+949	107%
その他大学計	180,528	178,592	-1,936	99%	148,187	149,728	+1,541	101%

※河合塾調べ ※「その他大学計」は難関10大学を除いた国公立大計

難関国立大の志願状況 難関10大学計では4年ぶりの志願者増 難関大にも積極的に挑戦

<図表10>は旧帝大を中心とした難関10大学の志願状況を前期日程・後期日程でまとめたものである。

難関10大学全体の前期日程の志願者数は、55,962人（前年比102%）と増加した。大学別にみると、10大学中6大学で志願者が増加し、なかでも北海道大、大阪大などでは高い増加率となった。共通テストの平均点が大きく下がったなかでも積極的に難関大へ挑戦している一方で、難関10大学の中で前年低倍率となった学部・学科などに志願者が集まる動きもみられた。以下、大学の状況を個別にみていく。

北海道大学

前期日程・後期日程ともに高い志願者増加率となった。前期日程を学部別にみると、前年志願者が増加していた教育、法学部では志願者が減少した一方、前年志願者が減少していた理系学部などでは志願者が増加するなど前年入試の反動がみられた。総合型選抜の拡充にともない33名の募集人員減となった総合理系では、志願者数が増加し倍率は上昇した。後期日程では、今春から廃止された医学部保健学科を除く学部・学科のみで志願者数を比較すると、前年から2割増加した。とくに、理一生物科学一生物学、農、獣医、水産学部などでは高い増加率となった。

東北大学

前期日程の志願者数は微減となったが、学部別にみると文、理、医の3学部では志願者が増加した。なかでも医一保健一看護学は前年比147%と大幅に増加した。前年入試で志願者が減少し低倍率入試となった反動とみる。歯学部は志願者が大きく減少（前年比65%）。過去2年の入試でも志願者減少が続いたが、今春も歯止めはかからなかった。後期日程では、理学部で志願者が前年から1割以上増加した一方、経済学部は微減となった（前年比98%）。経済学部では、前年高倍率だった理系型で敬遠された様子がうかがえた。

東京大学

大学全体の志願者数は4年ぶりに増加した。科類別にみると、理科一類を除き前年を上回る志願者が集まった。文科類では、文科二類が前年比107%と高い増加率となった。理科類では、理科二類で志願者が前年から1割以上増加した。理科二類では前年入試の合格者最低点が理科一類と比べて低かったことから、志願者が集まったようだ。共通テスト平均点ダウンの影響を感じさせない堅調な動向となったが、大学公表の第1段階選抜合格者の平均得点（900点満点）をみると昨年に比べ60点以上ダウンした科類もみられ、東京大志願者でも共通テストに苦戦した様子がわかる。

東京工業大学

今春は、全学院で前年を上回る志願者が集まった。今

年の共通テスト平均点の大幅ダウンにより、共通テストを合否判定に用いず第1段階選抜のみに利用する東京工業大に志願者が集まったものとみる。なかでも、工、物質理工学院（ともに前年比106%）、環境・社会理工学院（同113%）では高い増加率となった。志願倍率をみると、情報理工学院が9.0倍と最も高く、次いで理学院、工学院と前年入試から序列に変化はなかった。今春は、全学院をあわせて募集人員の4倍を上回る志願者数となったため、2段階選抜が実施された。

一橋大学

前期日程では、経済学部で大きく減少（前年比68%）したが、他の3学部では志願者が増加した。なかでも商学部は前年から2割以上増加した。2年連続で志願者が減少したことに加え、過去2年の入試で第1段階選抜が実施されなかったことから志願者が集まったようだ。経済学部のみで実施する後期日程は、志願者が大きく増加し、他の難関国立大と同様に受験生が後期日程まで積極的にチャレンジした様子がうかがえた。

名古屋大学

前期日程の志願者数は前年比95%と、国立難関10大学のなかで高い減少率となった。ただし、法、経済、理、農学部などでは前年から1割以上志願者が増加した。農学部は今春から2次試験で国語を課すが、入試科目の負担増は敬遠要因にはならなかった。一方、工、医学部では志願者が大幅に減少した。なかでも医学科は、前述したように第1段階選抜における共通テストの得点基準が高く、志願者数が半減した。人気分野である情報学部も前年比70%と大きく減少した。とくに前年高倍率だった学科で志願者減少率が高く、警戒された様子がうかがえた。

京都大学

前期日程では、2013年度入試以降志願者減少が続いてきたが、今春は9年ぶりに増加に転じた。学部別にみると、経済、理、総合人間学部では高い減少率になった一方、教育、工、農、薬学部では志願者が大きく増加した。とくに薬学部は2割増と大幅に増加。薬学系は全国的に人気だが、最難関である京大にも果敢に挑戦している。

工学部では、志願者が前年から1割以上増加。平均点が下がった共通テスト数学・理科を合否判定に利用しないことから、志願者が集まったようだ。志願倍率を学科別にみると、情報学科が4.6倍と最も高く、次いで建築学科3.7倍と続く。最も低いのは工業化学科（1.4倍）で、前年入試以上に学科間の差が大きくなった。

大阪大学

大学全体の志願者数は前年比107%と増加。過去3年志願者減少が続き、とくに2021年度入試では大きく減少していたが、今春は2020年度入試を上回る志願者数まで回復した。学部別にみると、法、経済、医、薬学部では前年から2割以上志願者が増加した。とくに法学部は前年比128%と高い増加率となった。全国的な法学系人気に加え、過去2年の入試で低倍率だったことが出願を後押ししたようだ。医学部では医学科、保健学科とも志願者が増加した。医学科は第1段階選抜で共通テストの得点基準（900点満点中630点）を設けているが、共通テスト難化の影響を感じさせない動向となった。理系学部を目を向けると、工学部では志願者が増加、基礎工学部では減少する結果となった。近年2学部間では志願者の増減を繰り返す隔年現象が続いており、基礎工学部は減少年にあたる。人気系統である情報科学科では依然として3倍を超える志願者数となったものの、他の3学科では2倍を下回った。

神戸大学

前期日程の志願者数は微減となったが、学部別にみると文学部では前年比158%と大きく増加した。前年入試で志願者が減少した反動とみるが、今春は2020年度入試を上回る志願者数となった。改組2年目の海洋政策科学部では、理系型で志願者が増加（前年比105%）した一方、文系型では前年の164人から63人まで大きく減少した。前年入試が高倍率となったため、敬遠された。後期日程では、理、工学部で堅調に志願者を集めた。なかでも工学部は前年比111%と大きく増加。とりわけ市民工学科では前年から5割以上増加した。前年入試で志願者が減少したことに加え、他学科と比べて共通テスト数学の比重が低いことから出願しやすかったようだ。

九州大学

前期日程では、教育、理学部では前年から2割以上志願者が減少したが、文、農学部などでは1割以上増加した。経済学部では、経済・経営学科の志願者が前年から2割以上増加した。共通テスト数学の配点比重が450点満点中50点と低いことも志願者増の要因と考える。人気が分野である薬学部の志願者は微減となったが、学科に

より状況が異なり、創薬科学科では3年連続の志願者増となった。臨床薬学科は、前年高倍率となったことから、警戒されたようだ。

後期日程では、法、経済、工学部で志願者が増加した。とくに法学部では前年比126%と高い増加率となった。近年、募集人員に対する倍率は8倍台で推移してきたが、今春は10倍を超えた。

Part 3 私立大学の志願状況

私立大志願者数は微増も競争緩和は続く見込み

私立大入試については、志願者数を調査した全国176大学の集計（3月11日時点）から検証する。この176大学の2021年度入試の志願者数の合計は私立大全体の志

願者数の8割を超えており、今春入試の概観は現段階で十分につかめるものとする。

176大学の一般選抜の志願者数は、全体で前年比102%と前年からやや増加した<図表11>。ただし、2021年度入試では志願者数がその前年から1割以上減少したことを鑑みると、増加率は小幅にとどまった。大学進学

<図表11>私立大 大学グループ別志願状況

学校区分		一般方式					共通テスト方式					合計				
		20年度	21年度	22年度	21/20	22/21	20年度	21年度	22年度	21/20	22/21	20年度	21年度	22年度	21/20	22/21
176大学 計		2,069,514	1,753,336	1,794,670	85%	102%	944,182	872,728	879,233	92%	101%	3,013,696	2,626,064	2,673,903	87%	102%
主な内訳	早慶上理	190,163	150,381	157,123	79%	104%	35,378	53,530	50,374	151%	94%	225,541	203,911	207,497	90%	102%
	MARCH	282,024	246,709	265,467	87%	108%	128,569	126,211	118,587	98%	94%	410,593	372,920	384,054	91%	103%
	成成明國武	68,128	57,739	62,702	85%	109%	31,312	27,525	29,009	88%	105%	99,440	85,264	91,711	86%	108%
	日東駒専	190,871	169,559	168,228	89%	99%	90,737	84,122	88,620	93%	105%	281,608	253,681	256,848	90%	101%
	首都圏理系10大学	163,828	145,327	153,156	89%	105%	116,243	117,007	139,598	101%	119%	280,071	262,334	292,754	94%	112%
	首都圏女子13大学	46,544	37,462	34,584	80%	92%	22,233	18,633	19,116	84%	103%	68,777	56,095	53,700	82%	96%
	関関同立	178,935	163,331	172,317	91%	106%	77,979	67,484	67,367	87%	100%	256,914	230,815	239,684	90%	104%
	産近甲龍	182,867	158,553	170,645	87%	108%	65,553	67,232	74,858	103%	111%	248,420	225,785	245,503	91%	109%
	北星学園・北海学園	7,310	6,224	6,538	85%	105%	3,564	2,805	3,122	79%	111%	10,874	9,029	9,660	83%	107%
	東北学院	5,571	5,502	8,176	99%	149%	3,217	3,356	3,725	104%	111%	8,788	8,858	11,901	101%	134%
	南山・愛知・中京・名城	72,532	64,149	67,889	88%	106%	43,874	38,817	40,791	88%	105%	116,406	102,966	108,680	88%	106%
	西南学院・福岡	47,599	40,699	41,104	86%	101%	25,283	20,435	20,793	81%	102%	72,882	61,134	61,897	84%	101%

※数値は3/11現在、河合塾集計（2022年度の志願者数が未公表・確定前の方式は集計対象外）

※大学グループ

早慶上理：早稲田・慶應義塾・上智・東京理科 MARCH：明治・青山学院・立教・中央・法政

日東駒専：日本・東洋・駒澤・専修 成成明國武：成蹊・成城・明治学院・國學院・武蔵

首都圏理系10大学：千葉工業・北里・工学院・芝浦工業・東京工科・東京電機・東京都市・東京農業・麻布・神奈川工科

首都圏女子13大学：大妻女子・学習院女子・共立女子・白百合女子・実践女子・昭和女子・聖心女子・清泉女子・津田塾・東京女子・東京家政・日本女子・フェリス女学院

関関同立：関西・関西学院・同志社・立命館 産近甲龍：京都産業・近畿・甲南・龍谷

率上昇により、人口減にともなう大学志願者数の減少はペースダウンしているものの、新型コロナの影響や入試の競争緩和を見込んで出願校数を抑える動きは継続しており、これが主な要因とみる。また、合格者数は2019年度から増加に転じており、2022年度入試でも現時点（3月11日）で判明している大学の合格者数をみると前年比106%と増加している。合格者数の詳細は本誌6月号でご報告する予定だが、私立大入試の競争緩和は今後も続く見込みだ。

方式別にみると一般方式の志願者数は前年比102%、共通テスト方式では同101%となった。今春は共通テスト平均点の大幅ダウンが話題となったが、私立大入試への影響は小さかったようである。主要大では出願を共通テスト前に締め切っていた大学が多かったことに加え、私立大では3科目型が主流で、平均点ダウンが目立った数学を必須としない大学が多いことなどが要因である。

このほか、英語資格・検定試験を利用する方式の志願者数は前年から1割近く増加した。新入試の目玉だった、民間の英語資格・検定試験の成績を入試に利用するための英語成績提供システムは頓挫したものの、英語資格・検定試験を受験する高校生は以前より増加しているとみる。英語資格・検定試験を利用する方式の志願者増はこれを裏付けるといえよう。大学別にみると、法政大の英語外部試験利用方式では前年比149%、早稲田大で英語資格・検定試験を利用する学部・方式では同119%など、難関大や大規模大で志願者の増加が目立った。

各大学グループには堅調に 志願者集まる

大学グループ別に志願状況を見ると、「首都圏女子13大学」を除き軒並み増加した。「早慶上理」「MARCH」グループでは、個別の大学でみても志願者が増加した大学が目立ち、法政大や明治大では志願者が10万人を超えた。「関関同立」グループでも関西大で前年並みとなったほかは、いずれの大学も志願者は増加しており、難関大を敬遠する様子はみられなかった。「日東駒専」「産近甲龍」ではグループ全体で志願者は増加したが、「日東駒専」は東洋大、「産近甲龍」は近畿大の志願者の増加によるもので、他の大学では志願者が減少した。東洋大では共通テスト方式で志願者が増加した。共通テス

ト方式では全方式で英語資格・検定試験が活用できるようになったことや前年入試の反動などが志願者増につながったとみる。近畿大では情報学部の新設に加え、既存学部でも志願者の増加が目立った。「首都圏理系10大学」グループでは志願者が1割以上増加したが、これは前年に続き共通テスト方式の受験料無償化で話題を集めた千葉工業大の志願者が大幅に増加した影響が大きい。「首都圏女子13大学」では東京女子大、大妻女子大などで志願者が増加した一方、学習院女子大、実践女子大では3割以上が減少したなど、大学により状況が異なった。

学部系統別—就職関連の分野に 集まる傾向高まる

<図表12>は、学部系統別の志願状況である。

私立大全体の志願者数前年比102%を基準にみていくと、文系では基準を下回る系統が多くみられた。「文・人文」では前年比96%と人気は低調だ。前年入試では新型コロナにより留学が制限されたこともあり、外国語・国際系学部で志願者の減少が目立った。今春は「外国語」分野ではさらに1割以上志願者が減少した一方、「地域・国際」分野や、「社会・国際」の「国際関係」分野では志願者が増加に転じた。こうした分野は外国語を勉強するイメージが強い「外国語」分野に比べて学びの幅が広くみえることから、コロナ後を見据え、志願者が戻ってきているものとみる。このほか、「法・政治」では志願者が前年比109%と高い人気を示した。

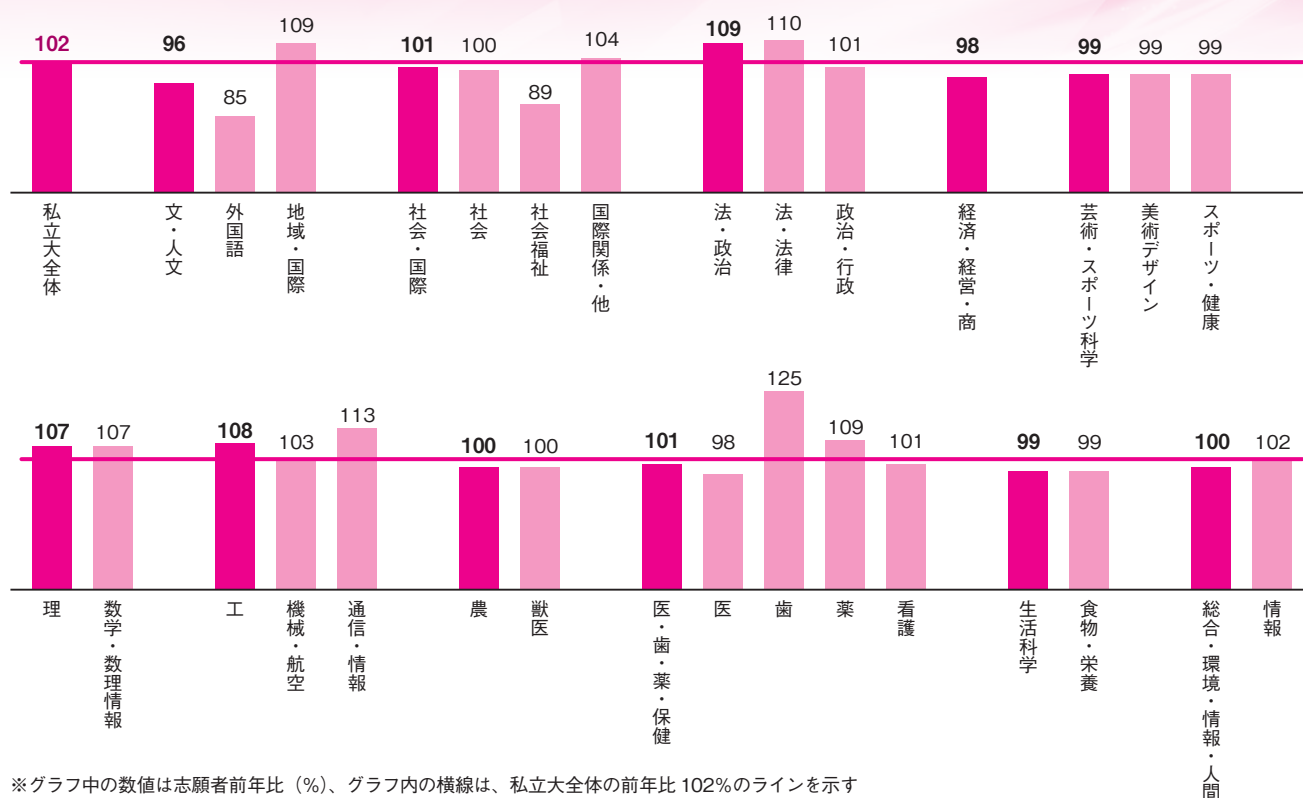
理系では、「理」「工」で増加率が高くなった。「工」では近年注目されている「通信・情報」分野で増加が目立った。医療系では、「歯」「薬」では高い人気を示した。文理ともに就職や職業、資格を意識した系統選びがみられた点は国公立大と同様である。

主な私立大の志願状況

<図表13>は、各地区の主な私立大の志願状況である。いずれも、3月11日までに判明した入試の集計である。今春は、志願動向に影響を及ぼすような変更が少ない入試といえるが、前年の入試の反動により志願者の増減が激しい大学・学部がみられた。

以下、主な大学について状況を確認する。

<図表 12>私立大 学部系統別志願状況



青山学院大

大学全体の志願者数は、47,839人(前年比119%)と2割近く増加した。前年入試では大掛かりな入試変更を行い志願者が大きく減少しており、その反動によるものとみる。方式別にみると、一般方式の志願者は前年比123%、共通テスト方式は同116%と一般方式での増加が目立った。学部別にみると、教育人間科学部を除く全学部で志願者が増加した。なかでも法学部は前年比161%と増加率の高さが目立った。法学部では全国的な系統人気であることに加え、今春よりヒューマンライツ学科が新設されたことで志願者が増加した。既存の法学科では募集人員195名に対し志願者が3,193人、ヒューマンライツ学科では募集人員60名に対し志願者が1,433人集まり、志願倍率(志願者数÷募集人員)でみると、ヒューマンライツ学科の倍率の方が高くなった。

慶應義塾大

大学全体の志願者数は37,894人(前年比103%)と5年ぶりに増加した。学部別にみると、文、総合政策、環境情報学部を除く学部で志願者が増加した。なかでも、商(前年比108%)、看護医療学部(同107%)は2年連続の志願者増となった。商学部はA・B両方式で志願

者が増加したが、英・数・地歴を課すA方式が志願者で1割増加した。看護医療学部では昨年、新型コロナ対応で実施をとりやめた2次試験の面接実施が復活、受験日数も例年通りとなったが、敬遠する様子はみられなかった。このほか、医療系の医(前年比111%)、薬学部(同114%)で高い人気を示した。

上智大

大学全体の志願者数は22,503人(前年比86%)と、「早慶上理」グループ内で唯一志願者が減少した。方式別にみると一般方式の「TEAP利用型」の志願者数が前年比95%と減少率が小幅にとどまった一方、共通テスト方式では同83%と大きく減少、「共通テスト利用型」「共通テスト併用型」の両方式で志願者が減少した。「共通テスト利用型」では前年入試の実質倍率(受験者数÷合格者数)が8.2倍と他の難関私大の共通テスト方式と比べ高かったことが減少の要因とみる。「共通テスト併用型」の減少については、文学部一部の学科や総合人間科学部では個別試験で総合問題など対策しにくい試験が課されていることから敬遠されたこと、個別試験で学科試験を課す経済学部では対策のしやすさから前年高倍率で難化したことが影響したとみる。学部別の状況をみ

<図表13>主要私立大 志願状況

大学名	一般方式				共通テスト方式				合計			
	20年度	21年度	22年度	22/21	20年度	21年度	22年度	22/21	20年度	21年度	22年度	22/21
北星学園	2,186	1,797	1,827	102%	1,167	837	876	105%	3,353	2,634	2,703	103%
北海学園	5,124	4,427	4,711	106%	2,397	1,968	2,246	114%	7,521	6,395	6,957	109%
東北学院	5,571	5,502	8,176	149%	3,217	3,356	3,725	111%	8,788	8,858	11,901	134%
千葉工業	53,563	47,095	52,824	112%	38,879	51,429	78,864	153%	92,442	98,524	131,688	134%
青山学院	46,683	20,056	24,614	123%	11,139	20,067	23,225	116%	57,822	40,123	47,839	119%
学習院	16,932	13,675	13,800	101%	—	3,433	2,821	82%	16,932	17,108	16,621	97%
学習院女子	1,946	1,709	1,143	67%	—	—	—	—	1,946	1,709	1,143	67%
北里	9,553	8,418	9,011	107%	3,263	2,717	2,742	101%	12,816	11,135	11,753	106%
共立女子	5,224	4,138	3,373	82%	787	1,128	766	68%	6,011	5,266	4,139	79%
慶應義塾	38,454	36,681	37,894	103%	—	—	—	—	38,454	36,681	37,894	103%
工学院	13,293	11,704	11,682	100%	7,393	6,506	8,827	136%	20,686	18,210	20,509	113%
國學院	17,414	13,273	14,868	112%	7,470	6,072	6,665	110%	24,884	19,345	21,533	111%
国際基督教	1,292	1,144	1,030	90%	—	—	—	—	1,292	1,144	1,030	90%
国士舘	11,948	8,027	7,245	90%	7,298	3,632	4,537	125%	19,246	11,659	11,782	101%
駒澤	18,458	17,446	18,151	104%	9,143	11,150	9,688	87%	27,601	28,596	27,839	97%
実践女子	3,991	2,731	1,917	70%	1,920	1,563	951	61%	5,911	4,294	2,868	67%
芝浦工業	23,788	21,393	22,182	104%	17,117	16,678	15,684	94%	40,905	38,071	37,866	99%
上智	26,156	5,412	5,123	95%	—	20,858	17,380	83%	26,156	26,270	22,503	86%
昭和女子	7,717	6,831	6,841	100%	3,755	3,205	2,773	87%	11,472	10,036	9,614	96%
成蹊	13,805	11,320	12,706	112%	8,008	7,310	6,756	92%	21,813	18,630	19,462	104%
成城	8,649	8,509	8,438	99%	5,646	5,093	6,891	135%	14,295	13,602	15,329	113%
専修	30,522	27,258	28,257	104%	17,243	17,102	15,311	90%	47,765	44,360	43,568	98%
中央	48,408	45,247	44,842	99%	36,820	32,110	18,513	58%	85,228	77,357	63,355	82%
津田塾	2,123	1,811	1,735	96%	2,222	2,052	2,245	109%	4,345	3,863	3,980	103%
東京工科	10,713	9,231	8,959	97%	6,990	4,179	4,073	97%	17,703	13,410	13,032	97%
東京女子	4,883	3,952	5,098	129%	3,108	2,918	3,228	111%	7,991	6,870	8,326	121%
東京電機	14,898	14,750	15,325	104%	9,293	9,382	8,196	87%	24,191	24,132	23,521	97%
東京都市	11,706	12,443	13,060	105%	17,657	13,225	8,881	67%	29,363	25,668	21,941	85%
東京農業	19,959	14,973	14,349	96%	9,369	7,214	7,545	105%	29,328	22,187	21,894	99%
東京理科	36,944	33,468	35,059	105%	19,411	15,833	18,198	115%	56,355	49,301	53,257	108%
東洋	57,151	51,034	48,936	96%	35,556	32,105	43,391	135%	92,707	83,139	92,327	111%
日本	84,740	73,821	72,884	99%	28,795	23,765	20,230	85%	113,535	97,586	93,114	95%
日本女子	7,073	5,892	6,248	106%	4,218	3,123	3,229	103%	11,291	9,015	9,477	105%
法政	71,423	65,756	79,537	121%	32,205	25,200	28,743	114%	103,628	90,956	108,280	119%
武蔵	13,947	10,773	12,722	118%	4,224	3,199	3,763	118%	18,171	13,972	16,485	118%
明治	75,693	71,551	76,328	107%	26,914	27,458	25,606	93%	102,607	99,009	101,934	103%
明治学院	14,313	13,864	13,968	101%	5,964	5,851	4,934	84%	20,277	19,715	18,902	96%
立教	39,817	44,099	40,146	91%	21,491	21,376	22,500	105%	61,308	65,475	62,646	96%
早稲田	88,609	74,820	79,047	106%	15,967	16,839	14,796	88%	104,576	91,659	93,843	102%
愛知	15,654	13,051	13,989	107%	6,820	5,341	5,656	106%	22,474	18,392	19,645	107%
中京	19,593	16,339	15,150	93%	14,025	11,564	11,960	103%	33,618	27,903	27,110	97%
南山	15,641	14,642	15,468	106%	6,496	6,931	7,614	110%	22,137	21,573	23,082	107%
名城	21,644	20,117	23,282	116%	16,533	14,981	15,561	104%	38,177	35,098	38,843	111%
京都産業	33,139	24,929	23,661	95%	19,110	13,362	11,851	89%	52,249	38,291	35,512	93%
同志社	39,654	36,490	37,726	103%	10,292	7,991	8,128	102%	49,946	44,481	45,854	103%
立命館	57,590	48,148	51,191	106%	37,192	26,805	27,770	104%	94,782	74,953	78,961	105%
龍谷	39,336	38,406	33,267	87%	10,428	14,538	18,925	130%	49,764	52,944	52,192	99%
関西	59,441	56,108	57,632	103%	20,444	22,437	20,024	89%	79,885	78,545	77,656	99%
近畿	99,652	86,337	105,110	122%	28,975	34,184	38,788	113%	128,627	120,521	143,898	119%
関西学院	22,250	22,585	25,768	114%	10,051	10,251	11,445	112%	32,301	32,836	37,213	113%
甲南	10,740	8,881	8,607	97%	7,040	5,148	5,294	103%	17,780	14,029	13,901	99%
広島修道	5,379	5,328	4,571	86%	3,924	3,925	3,449	88%	9,303	9,253	8,020	87%
松山	5,256	3,931	4,406	112%	1,576	1,987	1,727	87%	6,832	5,918	6,133	104%
西南学院	13,304	10,824	11,040	102%	7,464	6,238	6,138	98%	20,768	17,062	17,178	101%
福岡	34,295	29,875	30,064	101%	17,819	14,197	14,655	103%	52,114	44,072	44,719	101%

※数値は3/11現在、河合塾集計（2022年度の志願者数が未公表・確定前の方式は集計対象外）

ると、志願者が減少した学部が目立つ一方、外国語学部（同116%）の志願者は増加しており、外国語系分野が不人気の中、志願者を集めた。

中央大

共通テスト後期を除く志願者数は前年比82%と大きく減少、「MARCH」グループで最も志願者が減少した。方式別にみると、一般方式では前年比99%と前年並み、共通テスト方式では同58%と4割以上志願者が減少した。中央大では今春入試より、共通テスト併用方式や英語外部試験利用方式で受験料を値上げしたほか、併願割引制度を見直した。これにより「とりあえず」の出願数が減少したものとみる。

学部別の志願者数をみると、文（前年比93%）、総合政策（同96%）、理工学部（同89%）などでは一般方式の志願者は増加しており、大学全体の減少率より小幅にとどまった。

東京理科大

大学全体の志願者数は、53,257人（前年比108%）と大きく増加した。方式別では、共通テスト方式の増加率が高く、全国動向とは異なる傾向となった。共通テスト方式では共通テストのみ課すA方式、個別試験も課すC方式の両方式とも前年入試で志願者が減少しており、その反動とみられる。なかでもC方式の志願者の増加率の高さが目立つ。C方式では共通テストは英語と国語のみ合否判定に用いており、今年の共通テストは英語、国語の平均点の変動が小幅であったことも志願者増の一因とみる。学部別の動向をみると隔年現象が起きており、前年入試で唯一志願者が増加した先進工学部では志願者が減少に転じた一方、その他の学部では志願者が増加した。

法政大

大学全体の志願者数は、108,280人（前年比119%）と「MARCH」グループで最も志願者数が増加した。方式別にみると、一般方式での志願者の増加が目立った。

学部別にみると、前年の入試で易化した経済（前年比137%）、経営学部（同150%）の志願者が大幅に増加した。一方、グローバル教養（前年比66%）、現代福祉（同93%）、キャリアデザイン（同83%）の3学部では

志願者が減少した。グローバル教養学部のA方式では今春入試から英語の試験を廃止し、新たに英語資格・検定試験の成績を出願要件かつ英語の得点換算として利用することとなった。出願要件として求められるスコアが他大と比較しても高めとなっていることから、A方式の志願者が前年比46%と半減した。さらに同学部の英語外部試験利用入試でも実用英語技能検定のCSEスコアの基準が上がった影響から、志願者が前年比24%と大きく減少した。現代福祉、キャリアデザイン学部は前年入試で志願者が増加しており、今春の志願者減少はその反動とみる。

明治大

共通テスト後期を除く大学全体の志願者数は、101,934人（前年比103%）となった。方式別にみると、一般方式では志願者が増加した一方、共通テスト方式では減少した。学部別にみると、国際日本学部の志願者が前年比112%と増加率の高さが目立った。国際日本学部では今春より一部の一般方式で公民の選択が不可となったが、動向に影響はみられなかった。農学部の志願者も前年比111%と5年ぶりに志願者が増加に転じた。このほか、文（前年比110%）、政治経済（同110%）、理工学部（同106%）でも志願者は大きく増加した。一方で商学部は前年比92%と4年連続で減少が続いており、とくに共通テスト方式で減少が目立った。商学部は文系学部の中では唯一共通テストの「数学」が必須であり、敬遠が続いているとみる。

立教大

大学全体の志願者数は、62,646人（前年比96%）と減少に転じた。方式別でみると、共通テスト方式の志願者は前年比105%と増加した一方、一般方式では同91%と1割近い減少となった。前年入試では大掛かりな入試変更を行ったことで一般方式の志願者が増加しており、今春入試はその反動で一般方式への出願が避けられたとみる。

学部別にみると、ほとんどの学部で志願者が減少しており、なかでも経営学部（前年比84%）は減少率が高くなった。前年入試でも1割以上志願者が減少しており、低調な人気が続く。法学部（前年比124%）では唯一志

願者が増加、過去10年で最大の志願者数となった。今春は前年に易化した国際ビジネス法学科の志願者が大幅に増加した。

早稲田大

大学全体の志願者数は93,843人（前年比102%）と微増となったものの、前年に続き10万人を下回った。方式別でみると、一般方式では前年比106%と増加した一方、共通テスト方式では同88%と1割以上減少した。共通テスト方式は出願締切日が共通テスト後に設定されており、共通テストの平均点ダウンの影響もあったものとみる。

学部別にみると、教育（前年比111%）、スポーツ科学部（同110%）では志願者が1割以上増加した。スポーツ科学部は前年入試で共通テストを必須化したことにより志願者が半数近く減少した反動によるものである。一方で、同じく前年入試の共通テスト必須化で志願者が激減した国際教養、政治経済学部は今春も志願者が減少しており、志願者減少に歯止めはかからなかった。文、文化構想学部では今春より「一般選抜」で募集人員がそれぞれ減員となり狭き門となったが、両学部とも志願者は前年を上回った。理工3学部ではいずれも志願者は増加に転じたが、先進理工学部は前年比101%と増加率は小幅にとどまった。

同志社大

大学全体の志願者数は45,854人（前年比103%）となった。近年、志願者の減少が続いていたが、今春入試では増加に転じた。方式別にみても、一般方式、共通テスト方式とも志願者は増加しており、前年比もそれぞれ大きな差はみられなかった。学部別にみると、文（前年比115%）、社会（同111%）、法学部（同124%）などで志願者が増加した。理工学部では学部全体の志願者数は前年比103%と微増となった。インテリジェント情報工学科や情報システムデザイン学科といった情報系の学科での志願者増が目立った。一方、同じく情報系の文化情報学部の志願者数は前年比76%と大きく減少した。

立命館大

後期入試を除く大学全体の志願者数は、78,961人（前

年比105%）と増加した。方式別でみても、一般方式、共通テスト方式とも志願者前年比に大きな差はみられなかった。学部別にみると、経営、食マネジメント学部を除き、志願者は軒並み増加した。なかでも薬学部は前年比157%と大幅に増加した。薬学系の全国的な人気に加え、今春入試より薬学科と創薬科学科の2学科で併願制度が導入されており、これが志願者の増加につながった。このほか、文（前年比109%）、理工学部（同110%）なども志願者の増加が目立った。

関西大

後期入試を除く大学全体の志願者数は、77,656人（前年比99%）と前年並みにとどまった。前年入試では他の主要大の志願者が減少するなか、関西大では前年並みに志願者を集めた。今春も大きな入試変更を行わなかったことなどから、前年並みに推移したとみる。方式別でみると、一般方式では志願者が増加した一方、共通テスト方式では減少した。学部別にみると、法学部の志願者が前年比139%と増加率が大きくなった。前年入試の反動や、全国的な法学系人気は志願者増につながったとみる。このほか、社会安全（前年比117%）、政策創造（同113%）、人間健康学部（同118%）なども1割以上の増加となったが、これらの学部も前年入試で志願者が大きく減少しており、その反動とみられる。

関西学院大

共通テスト3月出願を除く大学全体の志願者数は37,213人（前年比113%）と大きく増加した。前年入試は合格者数を5割増と大幅に増やしたことで倍率がダウンし、易化したため受験生には挑戦しやすく映ったとみる。方式別でみても、一般方式、共通テスト方式とも前年比に大きな差はみられなかった。学部別にみると、文系学部の志願者増が目立った。前年入試で志願者が大きく減少したことに加え、今春入試より新たに文系10学部で共通テスト方式（1月出願7科目型）が実施されており、国公立大との併願者を呼び込んだことも一因とみる。再編して2年目を迎える理系4学部では、建築学部は前年比100%と前年並みにとどまったものの、他の3学部はいずれも志願者が増加した。